

図 2-91 CHAID 分析結果 (修士課程修了者 パターン 1)



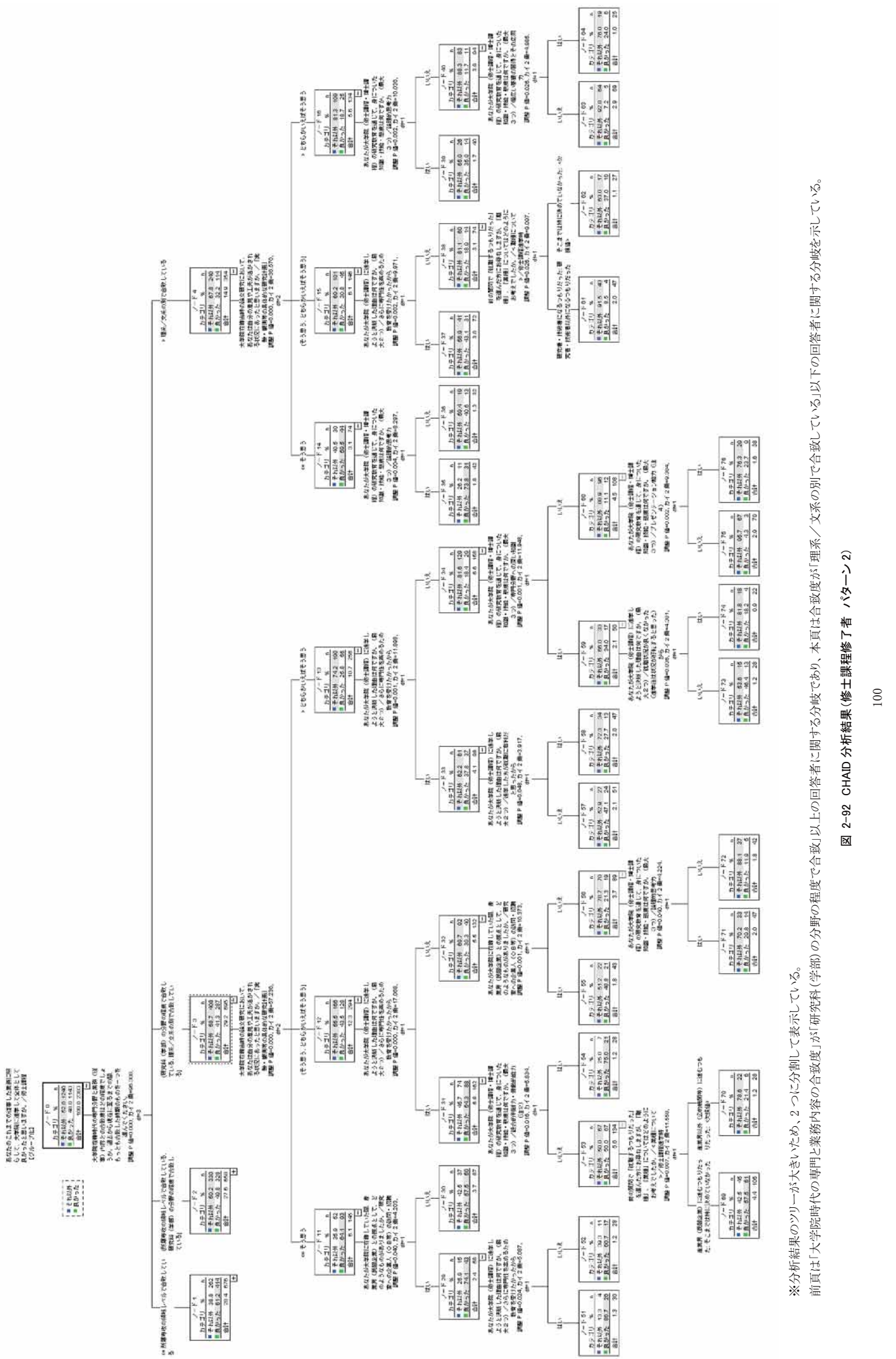


図 2-92 CHAID 分析結果(修士課程修了者 パターン2)

あなたのご自身のこれまでの進捗に  
照らして、本学院に進学して後と  
して良かったと思えますか、/博士  
課程【グループ化】

カテゴリー	%	n
それ以外	46.2	259
良かった	53.8	302
合計	100.0	561

大学院在学中の専門分野と業務  
(仕事)がどの程度ほど一致して  
いるか、進学から後進に至るま  
での進捗に満足していますか、  
の進捗に満足していますか、/博士  
課程 P値=0.000,カイ2乗=23.685,  
df=2

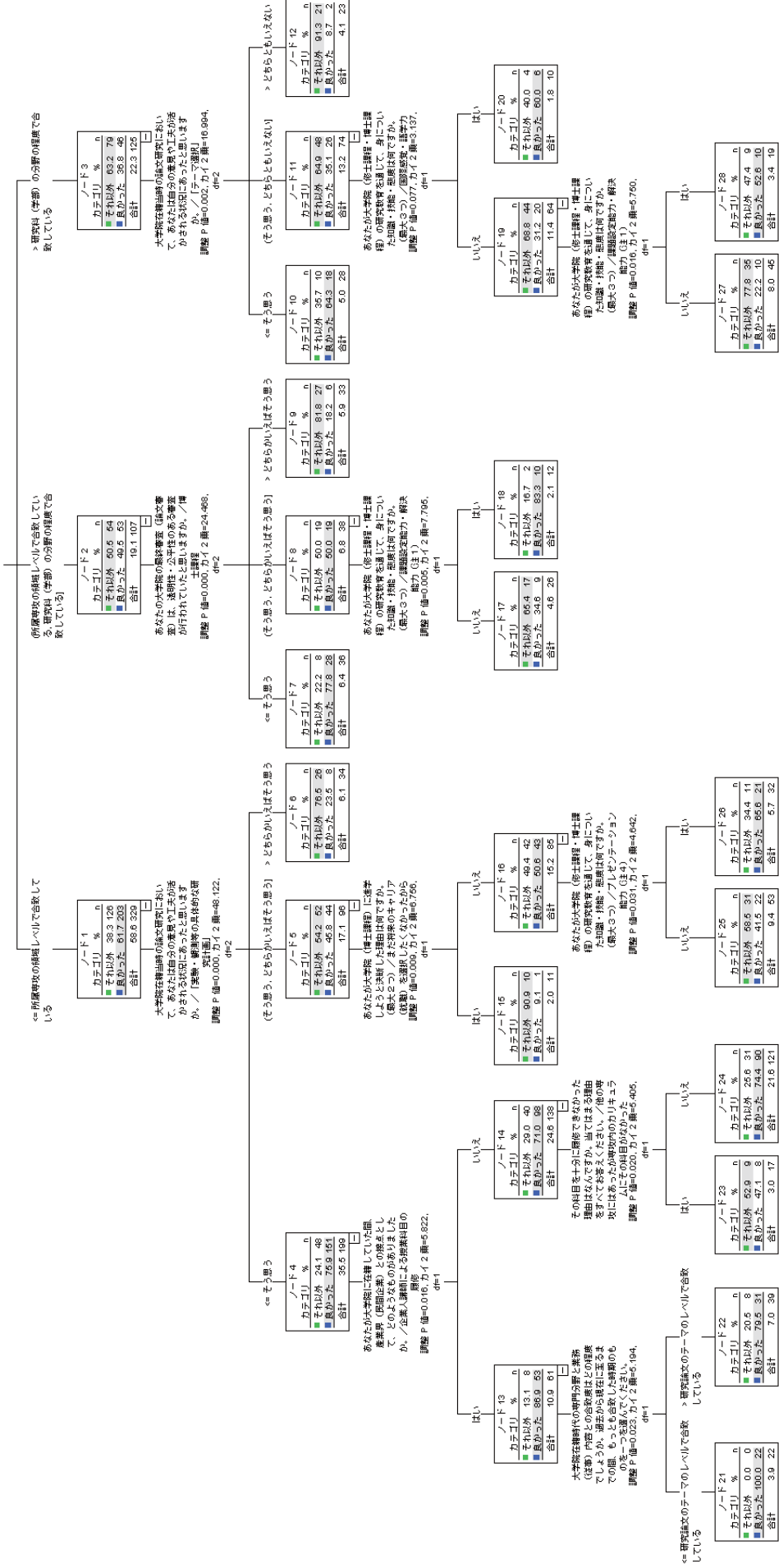


図 2-83 CHAID 分析結果(博士課程修了者 パターン3)

(2) クロス集計による影響度の確認

(1)ではCHAIDを用いて、多数の要因の中から、特に大学院の総合的満足度に影響を与えている要因を抽出した。以下では、これら要因について改めてクロス集計を実施し、その影響度を確認した。

(a) テーマ選択や研究計画への自身の関与

テーマ選択や研究計画に対する自身の関与度と満足度の関係について、修士修了者の集計結果を図 2-94に、博士修了者の集計結果を図 2-95に示す。修士・博士修了者いずれの結果においても、自分自身が関与できたと考えているグループほど、明らかに満足度が高い傾向にある。特に最も満足度の高いグループ(「進学して良かった」と回答したグループ)にはその傾向が顕著である。

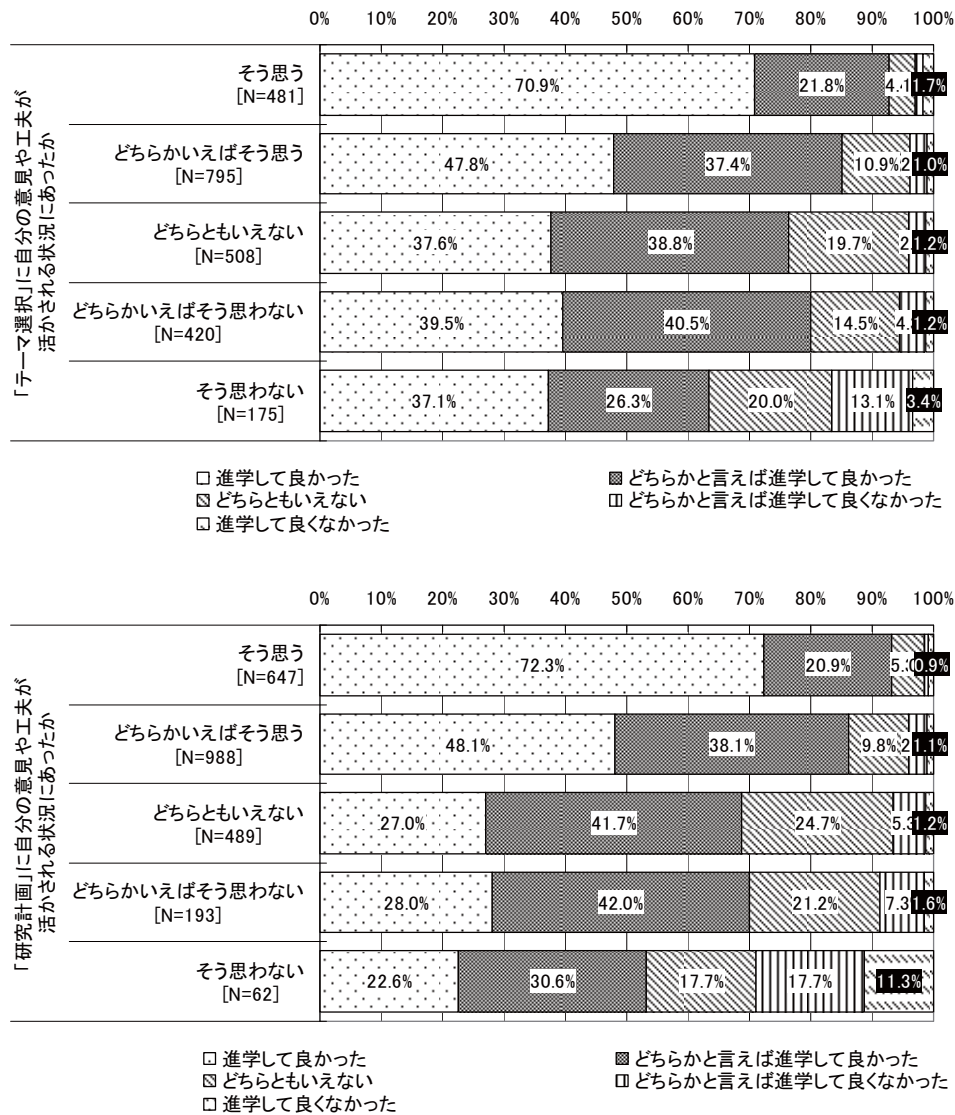


図 2-94 「テーマ選択や研究計画への関与度」×「満足度」(修士課程修了者で集計)

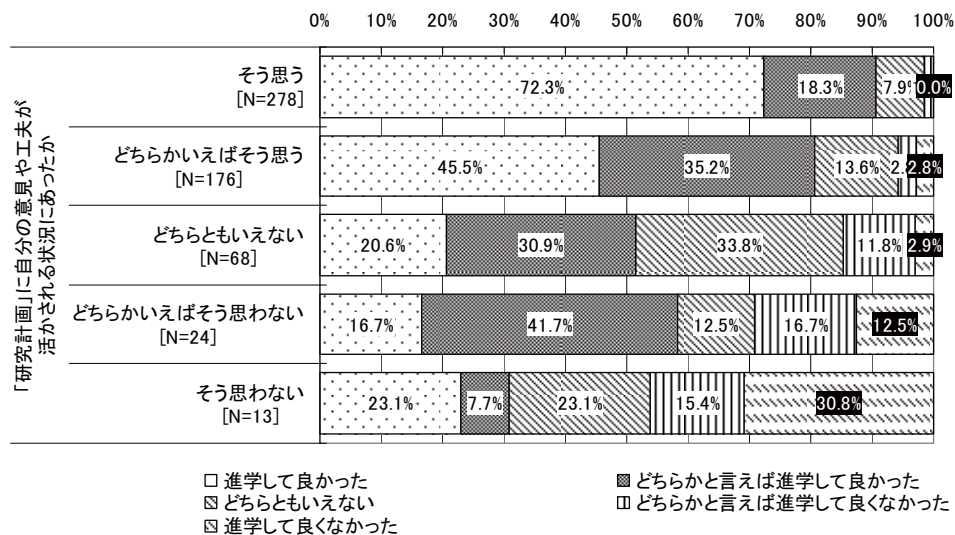
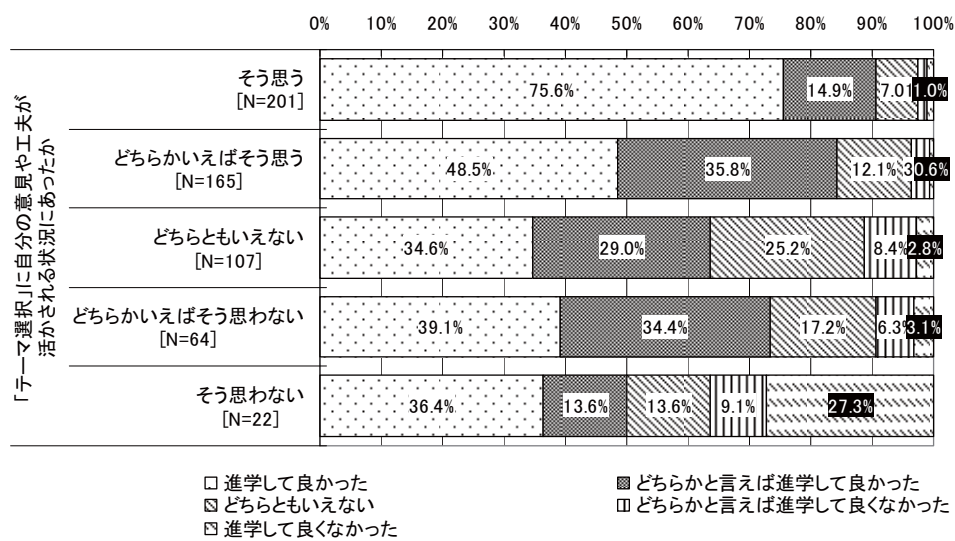


図 2-95 「テーマ選択や研究計画への関与度」×「満足度」(博士課程修了者で集計)

## (b) 進学理由の明確さとその内容

修士・博士課程への進学理由と満足度の関係について集計した結果を図 2-96～図 2-97に示す。なお、あらかじめ統計的検定<sup>8</sup>を行い、進学理由の該当・非該当で満足度が有意に異なるものだけを示している。

まず、修士修了者においては、「進学した方が就職に有利だと思った」を進学理由にしたグループとしていないグループで有意な差は見られなかった一方、博士修了者においては有意な差が確認できた点が注目される。近年、(特に理学系出身者を中心として)博士修了者が就職難に直面するケースが増加していることを考えると、「就職に有利」と思って博士課程へ進学した一部の学生が、実際の就職状況とのギャップ(例えば希望していたアカデミック・キャリアに就くことが困難であること等)に気づき、満足度を低下させている可能性も考えられる。

また、進学理由として「専門性を高める」以外は全て満足度を押し下げる効果を持っていることも注目される。その中でも「周囲の多くが進学するから」を理由にしたグループは、そうでないグループよりも顕著に満足度が低下している。大学院での学びを充実させ、満足度を高めるには、積極的な進学目的を持つことが重要であると考えられる。

---

<sup>8</sup> Mann-Whitney の U 検定を用い、有意水準は 5%として判定した。

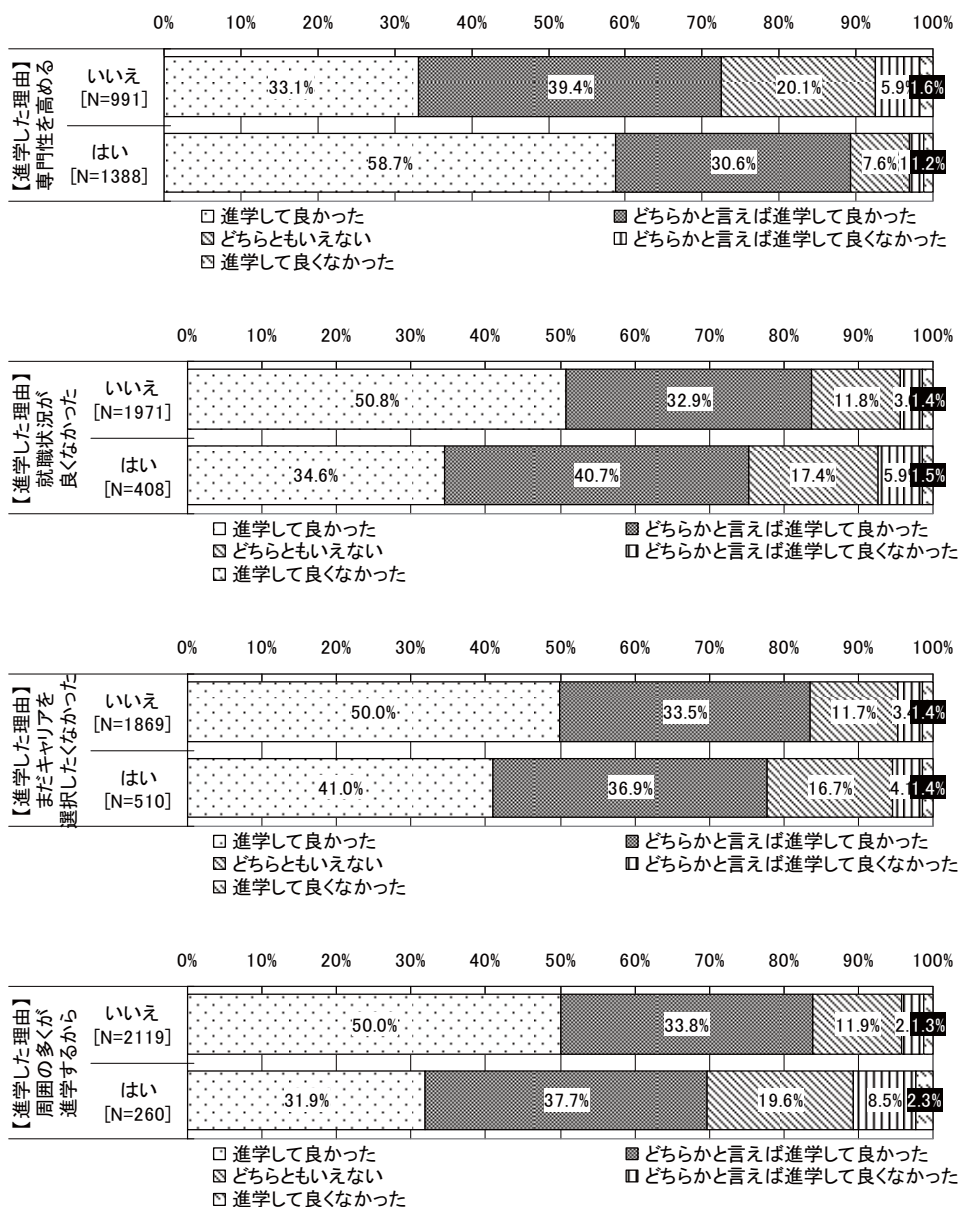


図 2-96 「進学した理由」×「満足度」(修士課程修了者で集計)



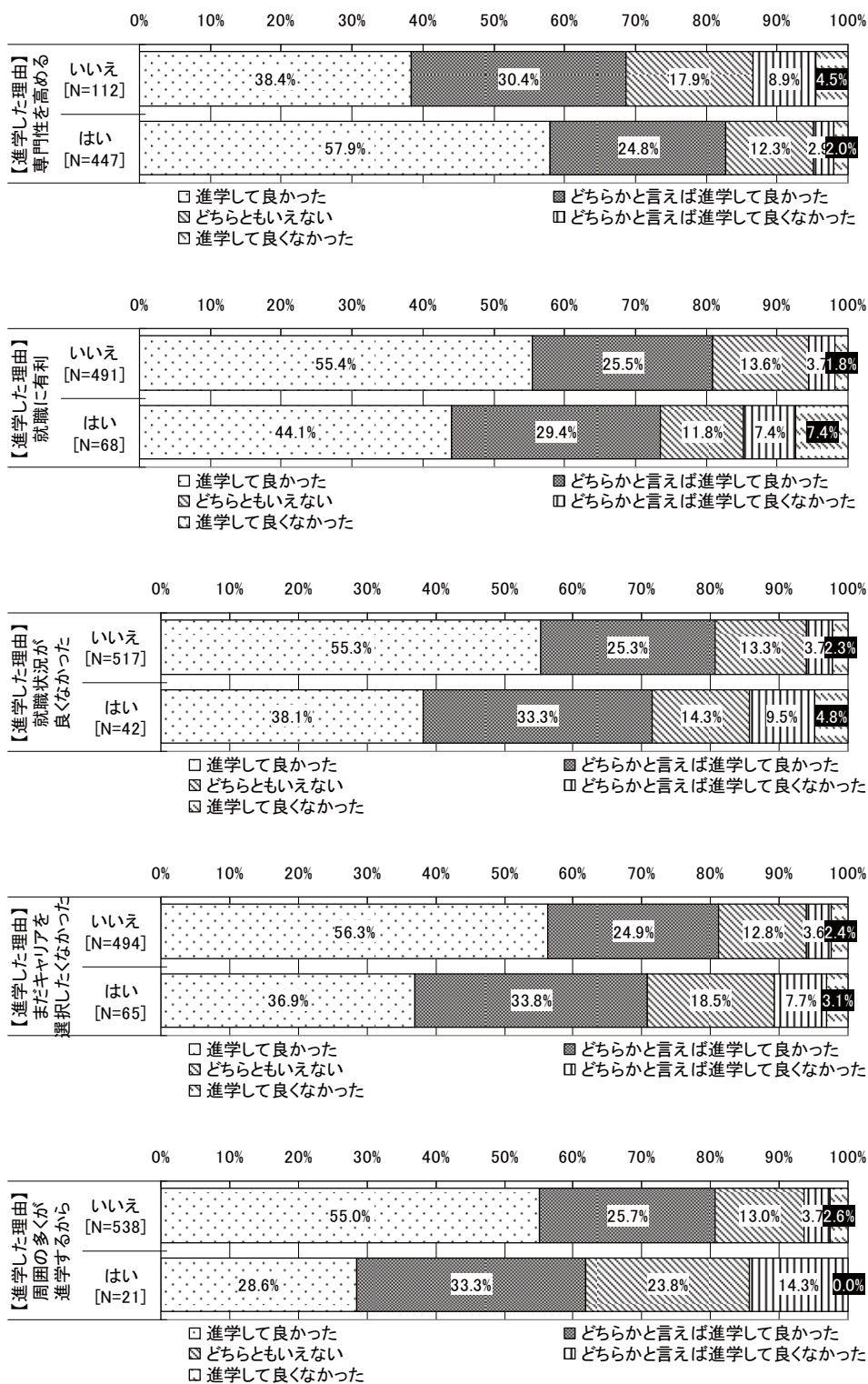
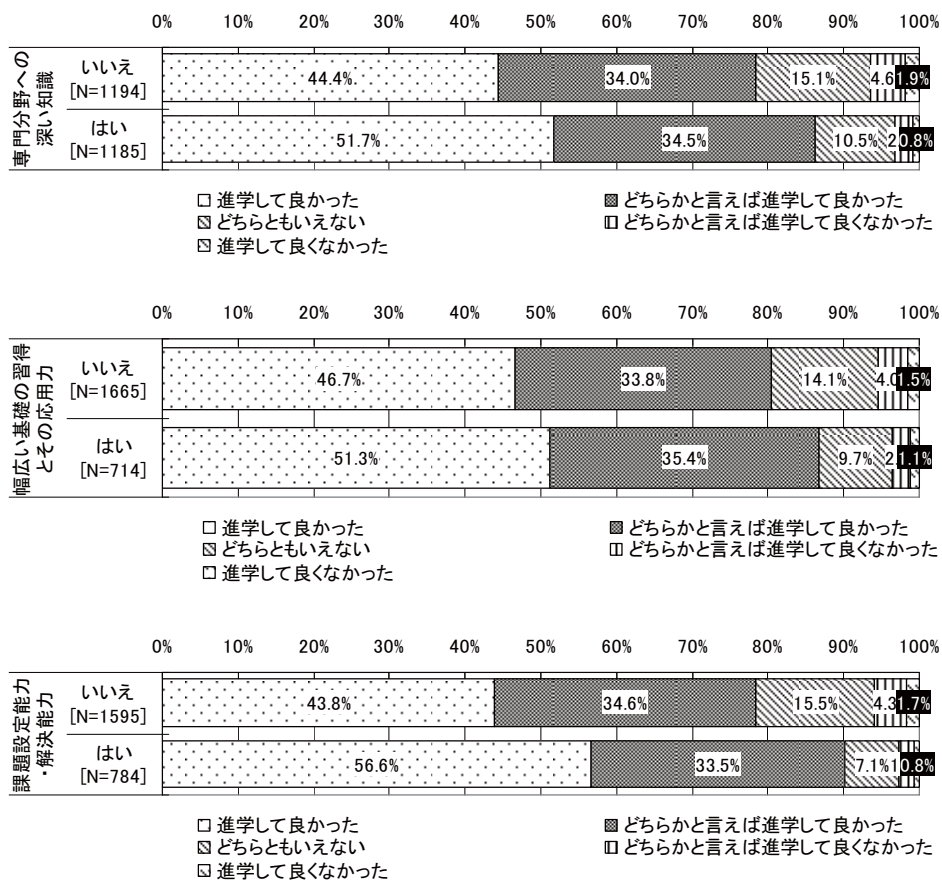


図 2-97 「進学した理由」×「満足度」(博士課程修了者で集計)

(c) 汎用的な知識・技能・態度の習得

大学院の研究教育を通じて身に付いた知識・技能・態度と満足度の関係について、集計した結果を図 2-98～図 2-99に示す。なお、あらかじめ統計的検定<sup>9</sup>を行い、その知識・技能・態度が「身に付いた」グループとそうでないグループの間で満足度が有意に異なるものだけを示している。

これを見ると、特に修士修了者において、汎用的な知識・技能・態度の習得状況が満足度に影響していることがわかる。博士修了者については、統計的に有意なものは「課題設定能力・解決能力」「独創性」の2つに留まっており、汎用的な知識・技能・態度の習得状況が満足度に与える明確な影響はあまり見られない<sup>10</sup>。



<sup>9</sup> Mann-Whitney の U 検定を用い、有意水準は 5%として判定した。

<sup>10</sup> 但し、修士修了者と比較して、博士修了者の回答数が少ないことを考慮する必要がある。一般に、回答者数が多い方が統計的に有意と判定されやすくなる傾向があるため、博士修了者の回答数をさらに大きく取ることができたとすれば、修士修了者と同様の傾向が見られる可能性は否定できない。

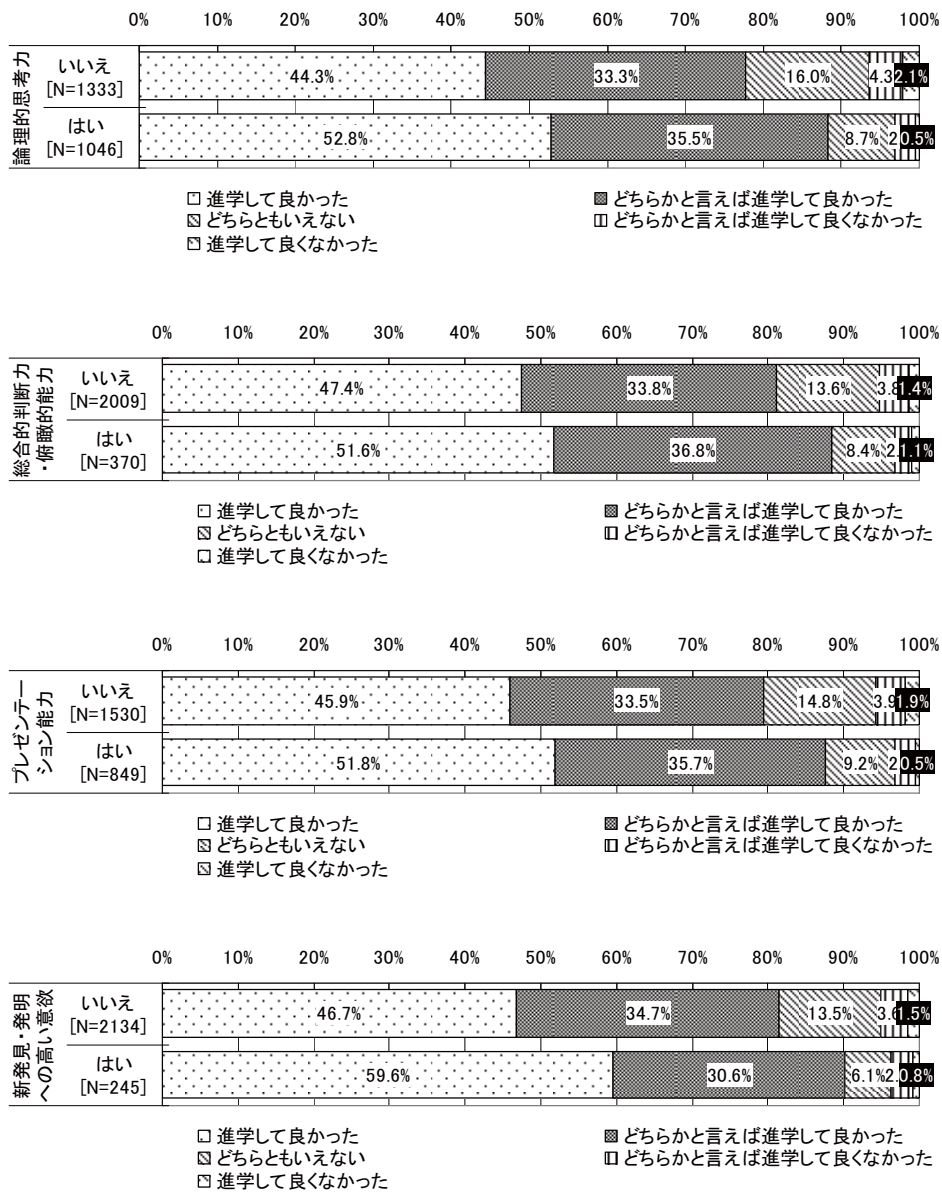


図 2-98 「大学院で身に付いた知識・技能・態度」×「満足度」(修士課程修了者で集計)

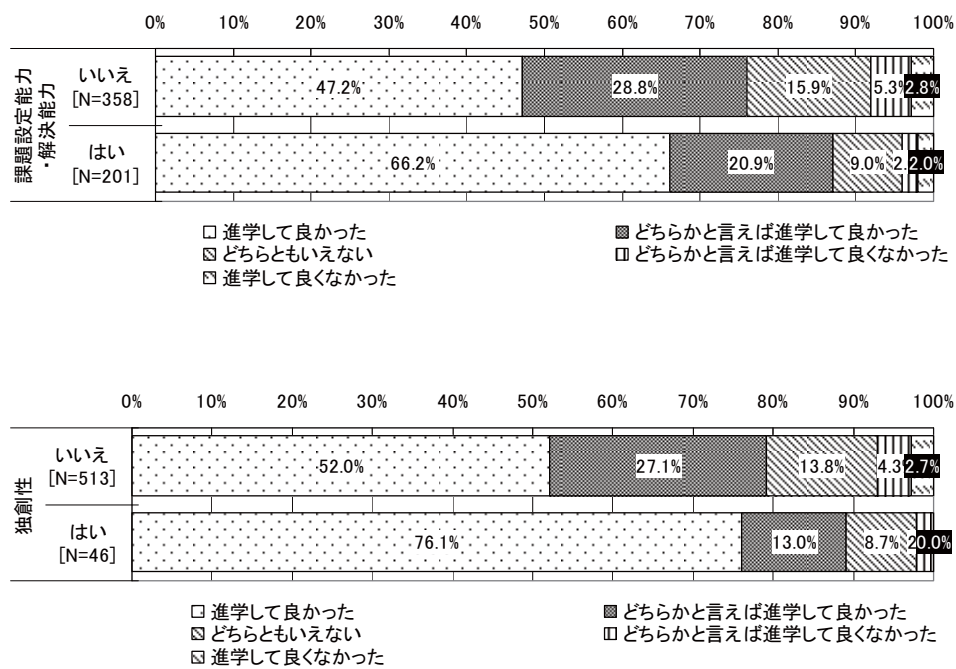


図 2-99 「大学院で身に付いた知識・技能・態度」×「満足度」(博士課程修了者で集計)

前述のように、大学院で身に付いた知識・技能・態度と満足度の関係は、「大学院時代の専門分野と業務の合致度」という第3の要因に影響を受けている可能性が高い。この点を確認するため、回答者を以下の2グループに分割し、グループ毎に大学院で身に付いた知識・技能・態度と満足度の関係を集計した。その結果を図2-100～図2-103に示す。

- グループA: 大学院の専門分野を活かして活動しているグループ  
(合致度は「研究論文のテーマレベルで合致」～「所属専攻の領域レベルで合致」)
- グループB: 大学院の専門分野を離れて活動しているグループ  
(合致度は「研究科(学部)の分野程度で合致」～「合致していない」)

修士修了者グループAの集計結果(図2-100)を見ると、知識・技能・態度の習得状況に満足度はあまり影響を受けていないが、修士修了者グループB(図2-101)では、「課題設定能力・解決能力」「論理的思考力」「総合的判断力・俯瞰的能力」など汎用的な知識・技能・態度の多くで、身に付いているグループとそうでないグループの間に満足度に違いが見られる。そもそも合致度が高いグループAでは、平均的な満足度が高いため、身に付けた知識・技能・態度の影響は相対的に小さくなっている可能性が考えられる。博士修了者の集計結果(図2-102～図2-103)では、回答者数が少ないこともあり、結果がやや不安定なため、修士修了者ほど明確な傾向は見られない。

以上のように、特に修士修了者の内「大学院の専門と業務内容の合致度」が低いグループにおいて、汎用的な知識・技能・態度の習得が満足度へ大きな影響を与えていることが明らかとなった。合致度が低いということは、大学院時代の専門に頼らず新たな領域へ挑戦することを意味しており、こうした場合には汎用的な知識・技能・態度が特に求められるものと考えられる。但し、こうした事実は、合致度が高いグループにおける知識・技能・態度の重要性を否定するものではないことに注意が必要である。むしろ合致度の高いグループは、(合致度が高いことで満足度が全体的に押し上げられているため)知識・技能・態度の習得による影響が見えにくくなっているだけであり、潜在的な要因としては存在していると考えられる。

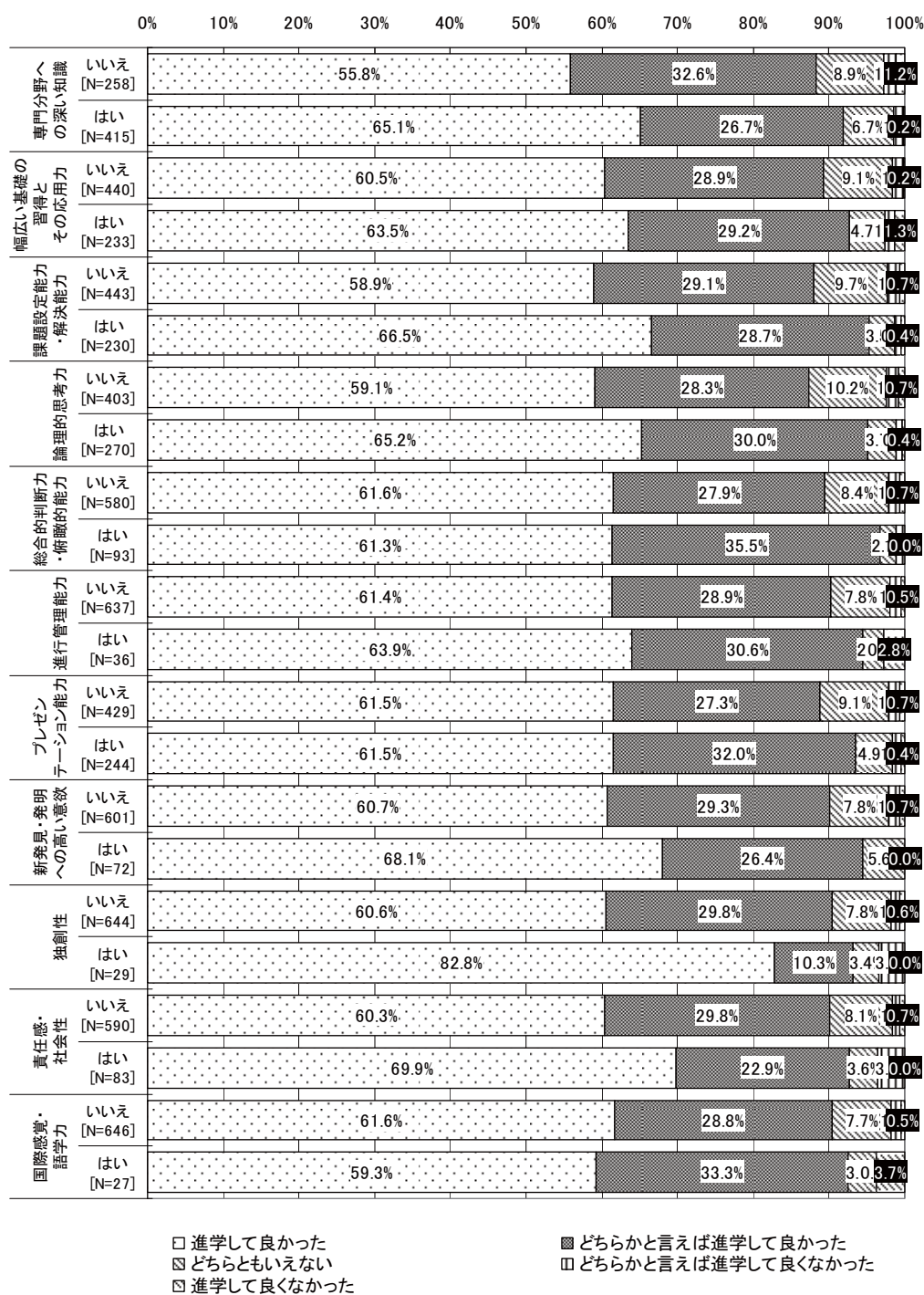


図 2-100 「大学院で身に付いた知識・技能・態度」×「満足度」(修士課程修了者、グループ A で集計)

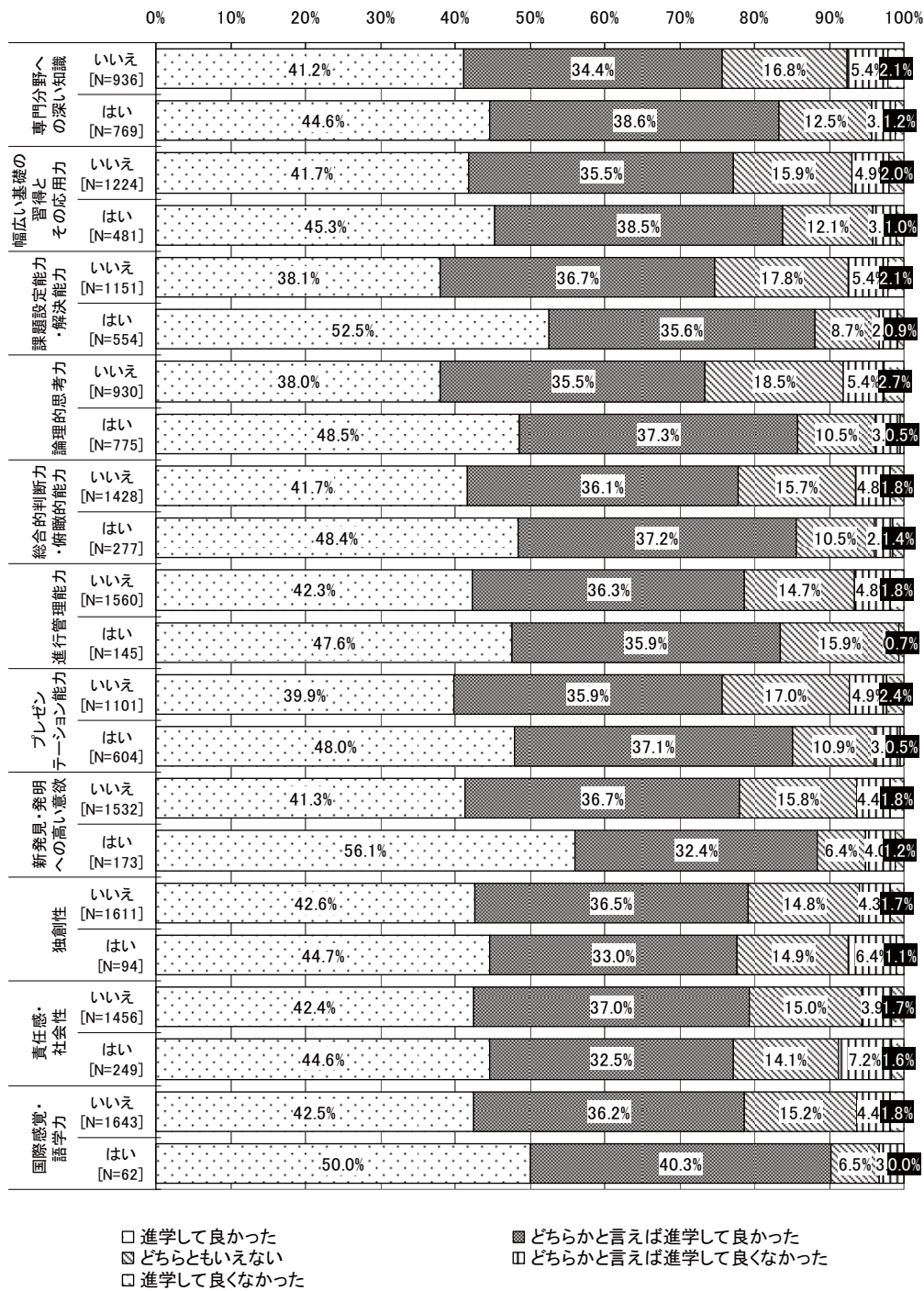


図 2-101 「大学院で身に付いた知識・技能・態度」×「満足度」(修士課程修了者、グループ B で集計)

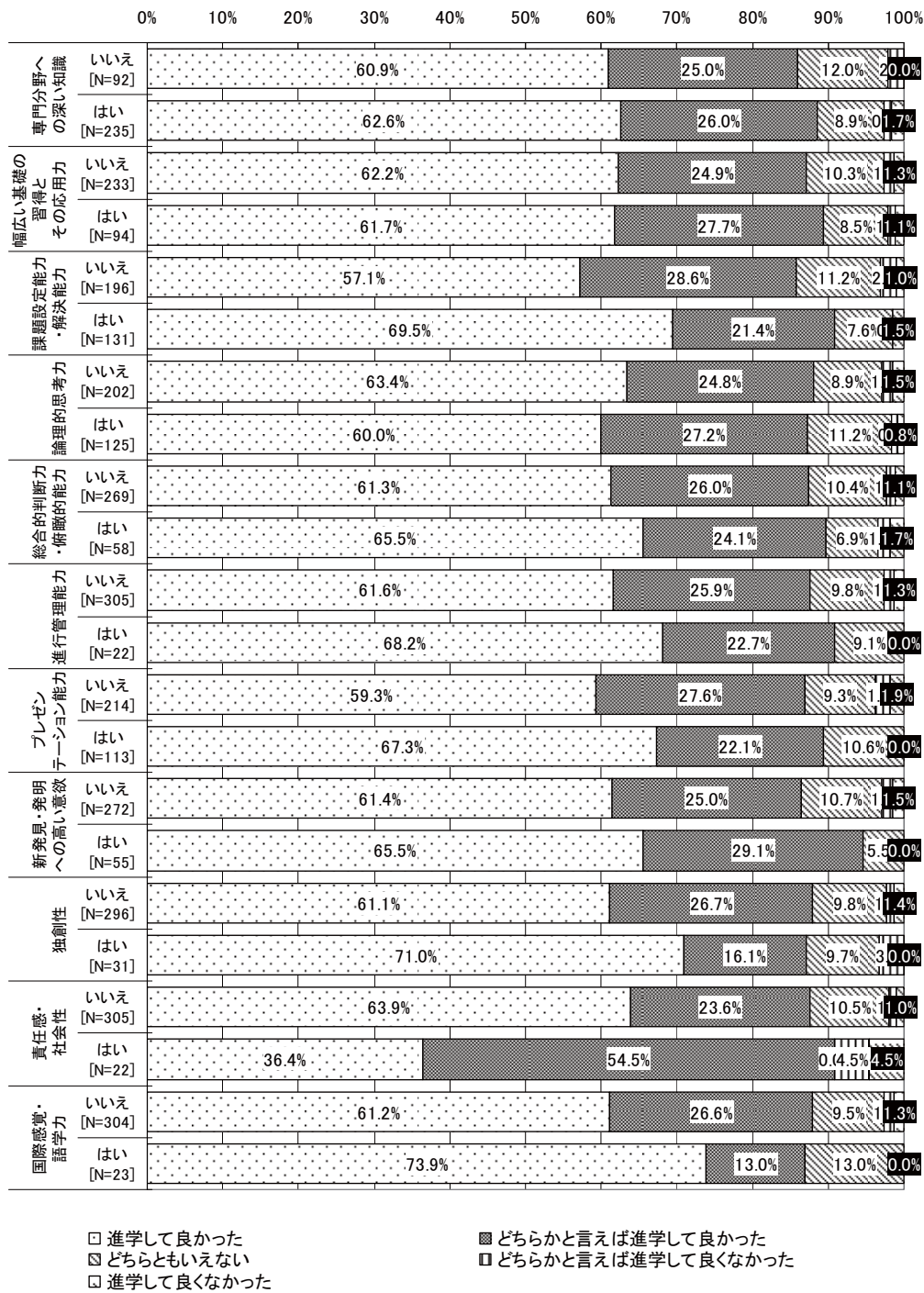


図 2-102 「大学院で身に付いた知識・技能・態度」×「満足度」(博士課程修了者、グループ A で集計)



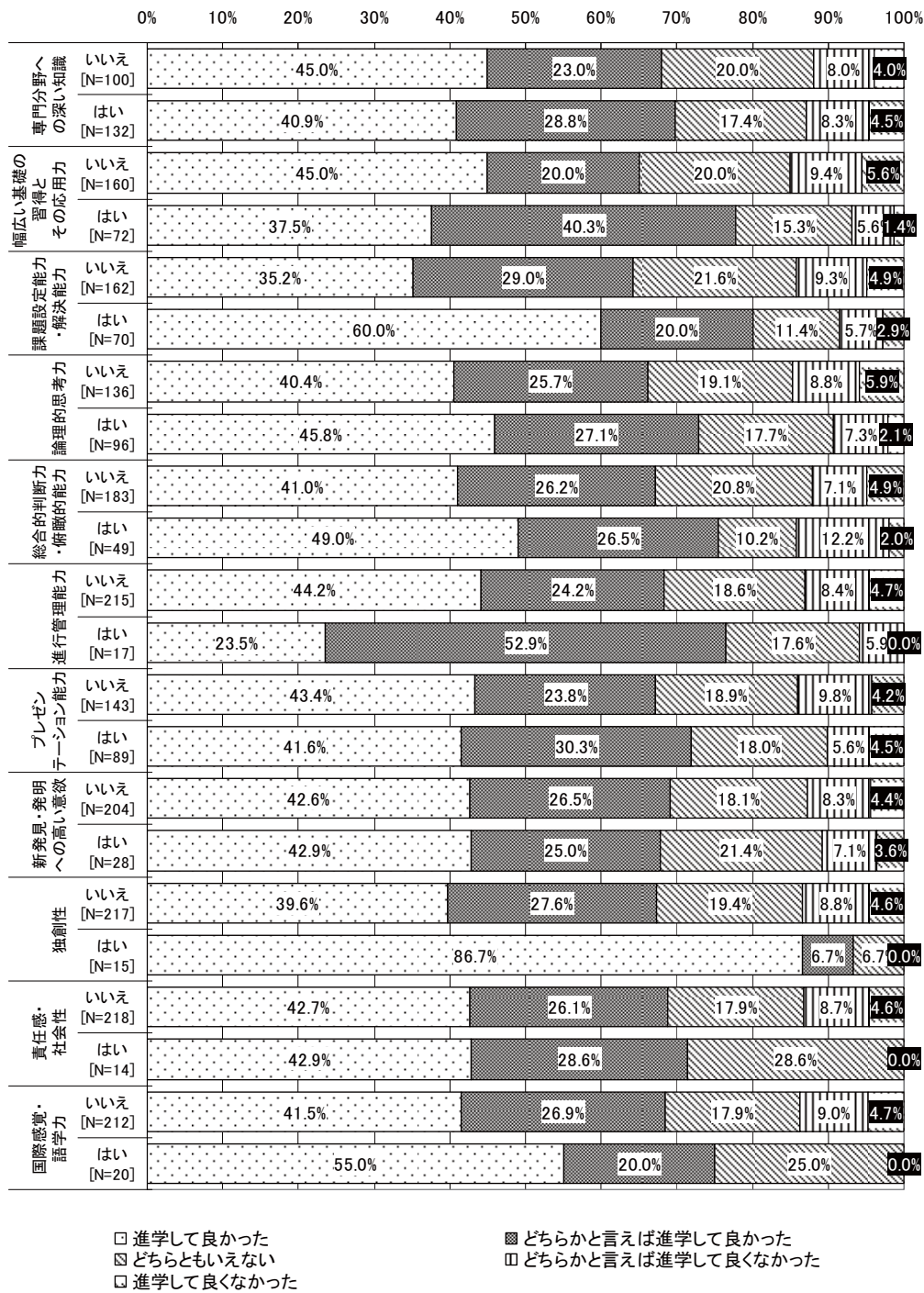


図 2-103 「大学院で身に付いた知識・技能・態度」×「満足度」(博士課程修了者、グループ B で集計)